

論文

『宮廷女官チャングムの誓い』の人間像

—人間としての女性と歴史—

幸 津 國 生

An image of human beings in “Dae Jang Geum”

—Women as human beings and History—

Kozu, Kunio

1. はじめに

韓国テレビドラマ『宮廷女官 チャングムの誓い』（原題：「大長今」）は、いわゆる韓流ドラマの中で代表的な時代劇として韓国ではもちろん日本でも大きな反響を呼んだドラマである。この反響は日本に生きるわれわれに次のことについて考えるように促している。すなわち、この「むかし」のドラマから「いま」われわれが何を学び、「これから」何を活かしていくのか、ということである。

このドラマの物語は16世紀半ば（朝鮮王朝中期）に実在した「長今（チャングム）」という名前の女性主人公の半生を描いている。ただし、彼女は実在したとはいえ、その生涯については詳しくは不明であり、したがって物語はほとんど脚本家による創作であるという^(註1)。つまり、歴史小説と時代小説との対比を手がかりに言えば、王の主治医として実在したという歴史への歴史小説的接点は『中宗実録』に記されたことに求められるが、物語は時代小説的に創作されているということになる。

物語の主人公の設定は物語を構成する要素を規定している。考察を先取りすることになるが、この設定を示そう。すなわち、主人公が女性であること、そしてこのこととの関わりで主人公は歴史

の制約（とりわけ身分制度）のもとで「女」として置かれていること、この歴史の制約にもかかわらず自らの道の追求によって主人公が「人」でありうること（好奇心の強い少女が人間として成長するには宮廷女官になり、また追放された後は宮中に戻るために医女にならなければならなかった）、その際当時の儒教的文化の中では女性はとりわけ母親として振る舞うことで歴史の制約を乗り越えざるをえなかったが、主人公もそのような振舞い方で（料理と医術との双方で）「人」として歴史を切り開いていくこと、これらのことがドラマという形で分かりやすく描かれている。

「人間としての女性」という捉え方はあまりにも「いま」では当たり前のことであらためて語る必要はないというように思われるかもしれない。しかし、このような捉え方は簡単に成立してきたのではない。このことがこのドラマにおいて描写されている。どのような事情がそこにあったのかはそれぞれの文化において異なるであろう。そしてとりわけその事情を描くところに韓国の「いま」の問題意識が現われているであろう。すなわち、おそらく「いま」では当たり前と思われそうな事柄をあらためて取り上げることに当の文化を構成する本質的な事柄として特別の意味が見出されているのであろう。その意味について十分明らかに

することはできないけれども、本稿としては、少なくとも「むかし」の課題が「いま」なお課題であり、それを明らかにすることで「これから」の方向付け示そうという「いま」の問題意識を受け取り、そこから学びたい。

その際、この問題意識に基づいて当の捉え方の成立を描くには歴史上の或る時代に焦点を合わせる必要がある。この時代について選り出されたのが、このドラマにおける時代設定であろう。つまり、女性が人間として生きることが他ならぬこの時代に歴史の前面に登場してきているという設定である。

物語のあらすじを簡単にたどろう。主人公はかつて宮廷女官であった母親の遺志を継いで宮中に入り、持ち前の好奇心を発揮しつつ困難にぶつかりながらこれを乗り越え師匠の尚宮の指導を得て宮廷女官として立派に成長する。そして最高尚宮を選ぶ料理競合に師匠に代わって挑み勝利するほどの料理の技術を修得する。しかし、陰謀によって師匠とともに奴婢の身分に落とされ濟州島に流刑となり、流刑地への途中で師匠を失う。それでも母親および師匠の無念の思いを晴らそうという彼女の意志は揺るがない。彼女はこの意志を貫くために流刑地でその時代・社会において宮廷に戻る唯一の手段である医術を身につける。そして機会を得て医女試験を受け合格し、宮廷医女となる。しばしばその医術上の能力を発揮して、王・皇后たちの信頼を得る。その上で、自分の復讐の思いと医術の理念との葛藤を克服して母親および師匠の無念を正しい形で晴らし、ついには王の主治医となり自分の名前の前に「大」が付く称号を受けるに至る^(註2)。

こうして主人公は「女」として生きることによって「人」として歴史の新しい局面を切り開く。つまり物語は料理および医術という歴史を超える技術によって歴史の制約に耐えて生き抜き、ついに母親およ

び師匠の無念の思いを晴らすという「誓い」^(註3)を実現する一人の女性の姿を描くことを通じて、人間としての女性と歴史との関係を捉えるのである。

ドラマではさまざまな事件が起きる。それらはドラマを構成する諸要素が重なり合って起きたことである。それらの重なり合い自体が物語の展開をなしている。そこでドラマを解釈するために、ゆるやかにドラマの展開つまり主人公の半生記におけるほぼ時系列に基づく展開に沿いながら、それら諸要素を見ていこう。

本稿では諸要素のうちの基本的なものについて次の七点において考察しよう。すなわち、物語全体の枠組みを予告する「運命」(2)、その枠組みにおいて主人公が自己の道として追求する「人間としての女性」(3)、その追求を不可避的なものとする歴史の制約としての「身分制度」(4)、その追求の内容を示す「料理」(5)および「医術」(6)、そしてその追求の中で主人公を支える「愛」(7)、最後にこれらからわれわれが何を学び活かしていくのかに関して「人間としての女性と歴史」(8)という点である。

2. 運命

<運命の認識>

前近代の時代には珍しくはなかったであろうが、人間たちの「運命」が予言という形で示される。その「運命」が人間たちの人生を貫く。その人生が物語として語られる。ただし、その「運命」が個々の人間たちにとってはその人生の個々の局面であらかじめ示されるわけではない。個々の行為の局面においては人間たちは自己の態度を決定しなければならないのである。ここに個人と「運命」との関係がいかなるものであるのかが問われよう。

ここで問われるのは、その個人が一定の行為の

決定についてその意味を「運命」の視点から認識しているのかどうかということである。さしあたり、この問いに対して個人は「運命」を認識しているとは言えない。というのは、もしそのように認識されているとするならば、そもそも個人と「運命」との関係の在り方について問われることはないであろう。むしろそれが認識できないが故にこの問いが立てられるのである。したがって「運命」が貫くといっても、個人の認識の次元を超えて生じていることである。つまり「運命」は、個々の人間の次元を超えているのである。それ故、それは一般に人間にとって抗うことのできない次元にある。

しかし、それは個々の人間にとってただその行為と関わりのないところで起きることを意味するものではない。むしろ、その事情については個々の人間にとって知られないにせよ、人間の行為によって惹起されるものである。つまり、この「運命」は人間によって担われているのである。本ドラマは主人公が「女」・「人」としてどのように、さしあたり「運命」として認識されたものを現実の社会制度、とりわけ身分制度との闘いを通じて実現するのかを描いている。そのようにして彼女は「女」・「人」として歴史を切り開くのである。

<物語の始まり>

チャングムの父チョンスは、彼が王の命令により毒を飲ませる役回りとなった魔妃ユン氏の声を思い出し、その声に怯え山道で足を踏み外し崖の下に転げ落ちたところを老師に助けられる。

老師 (舌を打つ) 哀れな運命よのう……。

チョンス どういうことですか? 老師様……おっしゃってください!/なぜ私の運命が哀れなのですか? 教えてください!

老師 お前の運命を三人の女が握って

おる。/一人目の女は、お前が死なせるが、死なぬ。/二人目の女は、お前が助けるが、お前により死ぬ。/三人目の女は、お前を死なせるが、多くの命を救うであろう。

チョンス 老師様!/どうすればよいのですか? どうすればその運命から逃れられるのですか?

老師 出会わなければよいのだ。

チョンス どうすれば? どうすれば一人目の女性を避けられるんですか?

老師 すでに会っておるではないか。それゆえ哀れなのだ。

チョンス それに……二人目の女……いえ、三人目の女により私が死ぬのですか?/ならその三人目の女は、三人目の女にはどうすれば会わずに済むのですか?

老師 二人目の女に会わねばよいのだ。

チョンス では、二人目の女に会わぬにはどうすればよいのですか?/教えてください! 老師様……。 (第1話、シナリオ・ブック 1: 13)

彼が「運命」から逃れられるためにどうすればよいのかという問いに対して彼に与えられた答えは「出会わなければよい」というものである。一人目の女性にはすでに会ってしまっているのであり、それ故「哀れ」だと言われるだけである。その一人目とは老師が彼に与えた紙に書かれた字から彼が死に関わったユン氏であることが分かる。この箇所では脚本家の小説ではチョンスはユン氏の声聞く。

「それを聴いた瞬間、チョンスの耳には、ユン

氏の血を吐くような最期の声が聞こえてくるようだった。/ “太子にこの者どもの、この者どもの極悪非道な行いを伝えておくれ” “今日のお前たちの仕打ちはそっくりそのまま、お前たちに返されるだろう” (キム・ヨンヒョン2006：上16)

一人目の女について老師が語る「お前が死なせるが、死なぬ」という言葉は意味が読み取りにくい表現である。彼が「死なせた」けれども、それで「死ぬ」、つまりその存在が終るのではなく、その後も彼の「運命」を支配するが故に「死なぬ」ということであろうか。そうであるとすれば、その息子の太子が即位後、母親の復讐をすることによって「運命」が貫かれるということであろう。(ここに否定的な仕方ではあるが、母親の役割が果たされるという本ドラマのテーマの一つがある。つまりここでは母親の恨みを晴らすという形で歴史を超えて母親の思いが受け継がれることになる。) かくて、すでにチョンスの「運命」は始まっているのである。それとともにこの長い物語が始められるわけである。

チャングムの父にとって「三人の女」との関係は、ギリシア悲劇における「運命」のように貫く^(註4)。本人も或る程度は認識していて、それを避けようとするが、結局それから逃れることはできない。チャングム自身が三人目の女として「運命」の表現となっている。その名前「長今」の由来は定かではない。ただ老師がチャングムの父に与えた紙の上に書かれた文字の一番目は「女」偏に「今」であり、直接には「不吉」の意味とされるが^(註5)、これはおそらく脚本家による物語の枠組みの提示なのであろう。すなわち、先の「死なぬ」という意味にはその影響が消えることがなく永久に続くという意味になるのかもしれない。

3. 人間としての女性

<好奇心の強い「女」チャングムの「人」としての形成>

主人公チャングムは性格がはっきりとしており好奇心の強い女性として描かれている。この物語においては一人の女性が、彼女の生きた当時の社会的条件のもとで、どのようにこの条件による「女」としての制約を乗り越え、「人」として自己を形成していくのかが描かれるのである。彼女にとってそのような自己形成が可能であったのは宮廷女官として宮中に入ることによってであった。つまり女性としては当時の最高の教育を受けることができたのは宮廷においてこそはじめて可能であったのである。女官となれば、官位も与えられ、当時の女性にとっては社会進出の最高の機会であったと思われる。当時の女性としては特権階級に属することができたわけである。ドラマで描かれている通り、そこには「王の女」という性格付けがなされ、側室になるという例外的な場合を除いて、生涯独身を送らなければならないという掟であったようである^(註6)。それを冒した者は「死」を強要されるという掟があり、それによって宮廷内では許されない恋愛をしたという虚偽の罪名により、チャングムの母親は「処分」されてしまう。

呪いの札を隠したと疑われたチャングムは自分が母親の料理日誌を探していたことを師匠のハン尚宮にも話すことができない。ハン尚宮は女官の掟に反することを行っただけとしてチャングムが「処分」されることを恐れたのだが、チャングムはそれでも子どもの時、両親の言い付けを守らなかったせいで両親を失ったことから、愚直に両親のことを誰にも話してはならないという母親の言葉を守ろうとするのである。母親の遺した料理日誌を探し出そうとするあまりの愚かな行為が自分の生命の危険を招いたのだが、そのことが宮中の陰謀を明るみに出す寸前にまで至るという仕方で個々

の人間の行為が全体の状況に関わっていくというドラマティックなシーンである。

チャングム 尚宮様! 尚宮様にそれをお見せできないわけではありません。/いつかは、尚宮様にお話し、お見せするつもりでした。/でも、今それをお見せすれば、皆に知れてしまうわけではありませんか?

ハン尚宮 私はお前を信じている。/お前が探していたものが、殿下に背くものであるはずがないと。/でも、なぜだめだというの?

チャングム 私も自分がなぜこんなに愚かなのかわかりません。/いえ、本当はわかっています。/幼い頃、父と母から話してはいけないと言われていたことがありました。でも、私はその言い付けを守れずに……。/そのせいで私の両親は命を落としました。/母の亡骸のそばで、長いこと、本当に長いこと座っていました。/何をすればいいのか?/どうすればいいのか?/自分のせいで、父と母を亡くしたのに、/私は生きて息をされていていいのか?/歩いていていいのか?/食べてもいいのか?/座らなければならないのか?/立っていなければならないのかもわからず/ただ座っていました。/ただ、ずっと……。/その時、私には母の声だけが聞こえました。/母の遺言です。/母は、日記と一通の手紙を遺してくれました。/そこに何が書い

てあるのか私は知りません。/好奇心の強い私ですが、まだ開けていません。/開けてはならないと言われたので、開けていないのです。/そして、誰にも両親のことを話してはならないと言われたので、/話さないのです。それが母の遺言でしたから。/私は、母の言葉に従いたいのです。(第11話、シナリオ・ブック1: 256)

蔵に閉じ込められたチャングムがやっと解放されたとき、ハン尚宮は意識を失ったチャングムを背負い、心の中でつぶやく。チャングムが「愚か」であることにこそ、ハン尚宮は弟子の愛おしさを見出すのである。この弟子にしてこの師匠ありと思わせる言葉である。

そのように監督・脚本家はふたりの人間像を描くのである。

ハン尚宮(声) なんて愚かなの……。/でも、だからこそお前が愛しい。/頭の中に余計なことが何も入っていないのが好きなのだ。/その一途さゆえにお前はこれから苦しむことになるだろう。/そして、私は気を揉むことになるだろうけれど、/でもそれでいい。そうやって生きていきましょう。(第11話、シナリオ・ブック1: 260)

この師匠の態度はさらにその師匠のチョン尚宮の態度を受け継ぐものである。つまり世代を超えて、権力に妥協しない態度が受け継がれるのである。ただし、チャングムの態度を責めるハン尚宮とは異なってチョン尚宮はやわらかくその思いをふたりに伝える。師弟三代の礼儀正しい立ち居振る舞いの中にも心温まる交流を描くシーンである。

ハン尚宮 お前のために、/お前を助けるために、尚宮様は信念を曲げたの。/お蔭でお前の命は助かったが、/尚宮様には生涯消えぬ無念と傷を負わせてしまった。/しかもそれゆえか近頃、もともと痛めていらした足が、さらにお悪いようだ。/申し訳ないことこの上ない。/どうしてお前がこんなにも多くの人を苦しめるようなことをしたのか、私にはわからない!

チョン尚宮 何がわからないというの?

チョン尚宮が足をひきずりながら入ってくる。

チョン尚宮 お座り。

チャングム 尚宮様! どうしたらこの罪を償えますか?/どうか私を罰してください!

チョン尚宮 蔵の中で絶食させられていたではないか、それで充分。/年寄りの傷などどうということはない。/若い者たちが生きていかなくは。/無実な者を犠牲にしてまで、私の無念を晴らしても何にもならぬ。

チャングム 尚宮様……。

チョン尚宮 とにかく水刺間にはお前たちが必要なのだ。/私は、このまま去っても思い残すことは何もない。/私は宮中に上り風流を嗜み、最高尚宮にまでなったのだからこれで十分。/何をしているの?ここでは客に水の一杯も出さないのかい?(第11話、シナリオ・ブック1:262)

厳粛で悲哀に満ちた場面になりそうなところをただ客への一杯の水を所望する一言を発することで自分の弟子・孫弟子の緊張をふっと解いてしまうチョン尚宮の絶妙な振る舞いである。

<女官として宮廷に入ること>

チョン尚宮が最高尚宮に選ばれたハン尚宮に贈るはなむけの言葉には宮廷に入ることが一人ひとりにとってどのようなことかを語っている。ここでは誰もが孤独であること、その寂しさ故に生ずるいろいろな人間の態度、そしてその人間たちとの係わり合いの難しさが強調されている。

チョン尚宮 明日、ようやくこの宮中から出て行くことが出来る。/遠い昔、幼かった私は父とたった一度訪れた宮殿が好きになり、両班の娘の私は父の反対を押し切って、宮中に上がることを決めたの。/でも幼いころ見た華やかな宮殿は虚像だった。/いつも人で賑わっているけれど宮中では皆、孤独。だから、その寂しさに疲れ果て、あんなにも嫉妬深いのかも知れないわね。/孤独に耐え切れず、殿下の寵愛を得るために必死になる者もいれば、孤独にさいなまれ、富を手に入れるようと人に取り入る者もいれば、孤独に打ちのめされ、権力でも我が物にしたいと、権謀術数を使う者もいる。/広い心で、慈しみなさい。/お前がお前の原則を重んじるように人々を重んじるのよ。/さもないと、お前のその毅然として態度が、人々を遠ざけてしまうだろう。/簡単なこと

ではない！ 毅然としつつも融通を利かせることは！/しかし、お前なら出来るはずだ。ほんの少し余裕を持ちなさい！/これがお前に贈るはなむけの言葉だ。/人との係わり合いが一番難しい。/水刺間の仕事はもともと、お前のほうが私より出来たから心配はないし……。(第21話、シナリオ・ブック2：107)

ここに示されるのは、他の人間との係わり合いをどのようにすればよいのかについて一般に通用しそうな指針である。

最期を迎えたチョン尚宮の遺灰を山頂から撒くチャングムに尚宮の声が聞こえる。宮廷女官というものの生涯の思いを告げる言葉である。哀しみの中にも時間空間を超える境地のみが伝えるであろう何か悠然としたものを感じさせる言葉である。

チョン尚宮(声) 私は……。宮中以外では暮らしたことがない。/だから、遺骨は雲の上に撒いておくれ。/雨になり流れ流れて、いろいろなところを見てみたい、/世の中を見物してみたいのよ。(第22話、シナリオ・ブック2：122)

ここで描かれたものは当時の仏教の在り方であるが、しかし、そのような特定の宗教に限られるものではないであろう。そこにはむしろ人間は自然から生まれ、また再び自然そのものに帰るという立場が表明されていると言えよう。これは、監督・脚本家による宗教的なもの一般への一つの解釈と言うべきものかもしれない。

4. 身分制度

<好奇心と身分制度>

チャングムの向学心に対して、母親ミョンイは

「白丁」には許されないとムチを打つ。彼女の向学心を支えるのは持ち前の好奇心である。そして好奇心の強いチャングムがまずぶつかるのは身分制度の壁である^(註7)。

チャングム ウンソンもユングォンもみんな勉強するのになんで私は勉強してはいけないのですか？

ミョンイ ウンソンやユングォンは両班のお坊っちゃん、お前は卑しい白丁(ペクチョン)の娘だって言ったでしょう？

チャングム でも、私も勉強が好きです。ウンソンより私の方が良くできるんです。

ミョンイ それでもだめです。/両班のお坊っちゃんたちは学問をして官職につくというのが決められた道だけれど、白丁の娘が学問をしたらそれだけでお前はひどい目にあうかも知れない。何回も言ったでしょう？ 両班には両班ができることがあって、中人には中人なりに、良人(ヤンイン)は良人なりに、白丁は白丁なりにできることがあるの。白丁が両班のまねをしたらそれだけで命を失うかも知れない。お母さんの言うことがわかったかい？

チャングム でも、お母さん！ うち白丁ではありません。(第2話、シナリオ・ブック1：30)

少女チャングムは身分制度にもかかわらず勉強ができるように父親にいつ中人になれるのかを訊く。チャングムは少女ながら知らぬうちに勉強するという仕方でも身分制度を超える方向、したがって歴史を超えるものへの方向に踏み出しているのである。

チョンス 勉強がそんなに好きか？
チャングム はい、お父さん。私は、今見えている天をあんな文字で書きあらわすのが不思議でなりません。見てください。黒い色をなぜこんなふうに書けるのですか？不思議ではありませんか？お父さん！お父さんはいつまた中人になるのですか？

チョンス さて。
チャングム 早くそうなれば落ちついて勉強して、訳官（ヨックァン）にもなれるし。（第2話、シナリオ・ブック1：31-32）

その彼女は母親の遺言に従って、女官になったわけであるが、女官になることを許されるのは中人以上という身分の差別があった。

そのことを端的に示すシーンがある。すなわち、料理競合の結果最高尚宮になったハン尚宮を彼女が奴婢出身であるとして最高尚宮であることを女官たちは受け容れないというシーンである（第21話、シナリオ・ブック2：109参照）。女官自身が身分制度の中で上層にあることを自己の誇りにしており、女性全体が差別されていたにもかかわらず、その「女」としての差別の中でさらに上下に囚われていたわけである。

<身分と書物>

その女官である大人になったチャングムは相変わらず向学心が強いが、書物に近づくのは困難で、彼女自身もそのことを自覚している。

チャングムがミン・ジョンホに初めて出会う場面で書物をめぐっての話が登場する。

ミン・ジョンホ 斎軒主簿があなたに書物を貸してほしいとの依頼の内容でした。

詩經をお貸しすればよろしいですか？

チャングム 一介の女官たる者がそのような経書など……。

ミン・ジョンホ 「一介の女官たる者」が経書ばかり選んでご覧になっていたではありませんか。/人が身分を問うのであって、書物は身分を問いません。（第8話、シナリオ・ブック1：180）

身分という制約を超えた書物というものの普遍性を明確に言い表わし、チャングムの向学心を支える言葉である。

5. 料理

<料理人の心得>

女官見習いのセンガクシであるチャングムに師匠ハン尚宮は水を運んでこさせるのだが、チャングムが彼女の運んでくるべき水に関して、それを指示したハン尚宮にこと細かに聞くまで繰り返し、運んでくるように指示する。そのようにして、師匠は弟子に料理人の心得を鍛えるのである。

こと細かに聞くチャングムが母親からそのようにするように学んだこと知って、そのようにさせる意味を語る。

ハン尚宮 そうよ。こと細かく聞くこと、それがまさにお前に水を持ってこさせた意味よ。/料理の前に、食べる人の調子と、好きな物、嫌いな物、体が受け入れるものを受け入れぬもの。/その全てを考えると、それが料理の心得だということを書いたかった。/しかし、お前はお母さまによって知っていたのね。お母さまは実に立派な方だわ。/お母さまは「水も器

に盛られた瞬間から料理になる」ことをご存じだったのね。/そして、その料理は、食べる人への配慮が一番だということ、「料理は人への気持ち」だということをご存じだったのね。(第4話、シナリオ・ブック1:98)

最高尚宮になったチョン尚宮はその最初の料理に熟柿が入っていたことを当てたチャングムを褒めて、味覚の平等性を語り、料理の実力をつけていくように語る。

チョン尚宮 料理というものは、作り手の腕に差はあっても、味をみる人には差がないものだ。/味見についてはみんなが平等なのよ!/したがってこれからは、料理については私はもちろん、あの端に座っているセンガクシに至るまで皆、率直に話し合い、お互い刺激を受けながら実力をつけていくことにしよう。(第5話、シナリオ・ブック1:124)

料理についてそれが権力に利用されることを認めないという料理倫理を主張する立場からの言葉がおそらく監督・脚本家の立場を表明するものとしてセリフとなっている。例えばその言葉に示される志を理解しつつもチャングムだけが死ぬことになることを恐れるハン尚宮に対してチョン尚宮が言う言葉である。

チョン尚宮 私心ならずも最高尚宮の地位についての理由はただひとつ!/どのような時でも、どのような理由であれ、/大殿水刺間でお出しする食べ物を権力を得る手段として利用する者どもが大嫌いだからだ!(第11話、シナリオ・

ブック1:258)

<料理の能力>

料理という技術を担う人間への注目の背景をなすものとして料理の能力そのものについての次のシーンが興味深い。つまり、料理の技術が成立するためには技術を磨くこと自体を可能にする能力があるというのである。

ハン尚宮は最高尚宮を選ぶための料理競合の助手としてチャングムを指名するとき、味覚を失ったとして躊躇するチャングムに料理に必要な二つの能力について語り、第一の「料理の勘」に加えてチャングムがハン尚宮自身にも欠けている第二の「味を描く能力」を自覚するように促す。

ハン尚宮 お前には、料理をする者に必要な二つの能力がある。/料理をするのには、二つの能力が必要な。/ひとつは、もちろん、「料理の勘」よ。/天賦の才能として料理の勘に恵まれた人がいるの。/血のにじむ努力をして定規で測ったような味を出す人もいるが、/お前は、血のにじむような努力もし、/天賦の能力もある。(第13話、シナリオ・ブック1:306-307)

料理人の心得として料理する者の料理への態度についてチャングムが悟るシーンがある。つまり、料理をするためには特別の秘法があるわけではなく、真心と時間こそがすべてということである。

ミン・ジョンホへの感謝のために料理を作るチャングムはその態度を相手が喜ぶことを願って次のように言う。

チャングム 私はいつも料理を作るとき、食べる方の顔に笑みが広がればと願いながら作ります。(第15話、

シナリオ・ブック1：365)

しかし、そのような態度をいつも貫けるわけではない。目標を達成するために近道を取ろうとして結果が裏目に出ることもある。チャングムは料理における技術偏重に陥ってしまうわけである。

料理競合での課題に「秘法」を用いたチャングムが敗れたとき、師匠ハン尚宮に小手先の方法について指摘される。

ハン尚宮 今回の課題は何？

チャングム 民が食べられるものを新しく作る……………。

ハン尚宮 貧しい民はいい骨や肉で汁を作ることが出来る？/お前が秘法といった牛乳を入れて作ることが出来るの？/民がソルロンタンを食べるのは、いい骨と肉は買えないから、粗末なものでもじっくり煮込むことで、その骨のすべてを利用し、美味しくて体にもいいものを食べるためよ。/なのに、お前はただ勝ちたい一念で、料理人の心得を忘れてあちこち駆けずり回り、その賢い頭で小手先の方法など考えついたのね！（第16話、シナリオ・ブック1：385）

ハン尚宮にしてみれば、チャングムの類稀な才能・能力を自覚させたにもかかわらず、それがかえって仇になってしまったわけである。心と心から離れた技術とが対置される。

ハン尚宮 私は、炭の効力を見つけ出し、泉の水でネングクスを作り、御膳競演ではスンチェでマンドゥを作るお前のその才能を買い、お前に味を描く能力があることを自覚させたのだ。/でも、その

才能がかえって仇になってしまったようね。/心を込めることを忘れ、いい材料と小手先に頼るような子だったとは。（第16話、シナリオ・ブック1：385）

チャングムには師匠の真意を理解することがなかなかできなかつたようである。ハン尚宮はチャングムの「小手先」の料理のせいで自らの競合に破れたことについては何も言わない。競合の結果についてはチャングムにその料理を委ねた自己の責任として潔くハン尚宮が負うのである。彼女が問うのはあくまでチャングムが料理人の心得を修得しているのかどうかである。やがてチャングムにはこのことが分かる機会が訪れる。

チャングムは皇后の保母であった尚宮が病気で死を迎えようとしているとき、オルゲサル（山腹の田んぼは収穫が遅くなるので秋夕〔訳注：チュソク、陰暦8月15日に新米や果物を供えて先祖の祭祀を行い、墓参りをする。〕の祭祀に新米を先祖に供えることができず、そこで実る前の稲を刈り、ついて、乾かしてつくるという。第16話、シナリオ・ブック1：405参照）を死んだ兄に上げたいというその願いをかなえようとして、速く乾燥させたものを尚宮に出すが違うと言われてしまう。そこに寺で働く処士が出来上がったと持ってきたオルゲサルを噛んでその味を知る。

チャングム 秘法なんて……………秘法があるわけではなかつたんだわ。/処士様、秘法なんてあるわけじゃなかつたんですね。/あの美味しい山菜も、尚宮様の願いをかなえたあの米も……………。/日に干してはしまい、また干してはしまい……………。/真心と時間……………それがすべてなんですわ。

処士 そのとおりです。/母親が言って

たんです。/どうせ腹いっぱい食べることは出来ないなら……/真心だけでもいっぱい食べてお腹を満たそう、/だから……どんなことがあっても未熟なものをごまかして人様に出しちゃいけないって……。

チャングム はい。(第16話、シナリオ・ブック1：406-407)

ここでチャングムは悟った事柄が何であったかをミン・ジョンホに語る。その言葉のうちに脚本家の視点が示されている。すなわち、才能というものが「汗と真心」を超えるものではありえないということである。

チャングム 実は師匠を恨めしく思っていました。/結果が悪かったので、いつもは誉めてくださった私の才能を、評価なさらないものと思いました。/私は一生懸命やりました。/でも間違っていました。/私がした努力は人に勝つための努力だったんです。/ここに来てからも、私は人に特別な秘法を聞きだそうとするばかりでした。/だけど、特別な秘法などありませんでした。/そこに注がれた汗と真心がすべてだったんです。/亡くなるかもしれないと、小細工をして差し上げた米は、尚宮様の心に届かず、真面目な処士の米だけが尚宮様を動かしました。/ですから私の才能が仇になったと、ハン尚宮様はおっしゃったんです。/才能に溺れる人間になるのではと……。

ミン・ジョンホ 羨ましいです。/実に素晴らしい

師匠ですね。/目先の目標にとらわれ、ソ内人がうわべだけの人生を送りはしないだろうかと、恐れられたのでしょうか。/でも、私は信じています。/今回はうぬぼれたかもしれない。でもソ内人は「食べる人の顔に笑みが広がればと願いながら料理を作る」……素朴な心を失う人ではありません。(第16話、シナリオ・ブック1：407)

このように料理というものが料理人にとってその人生そのもの、あるいは人間としての在り方に結び付けられているのである。

料理へのこのような態度は、料理に好みがあり贅を尽くした料理に慣れた明国の使節(正使)をも動かす。

正使 私は今まで美味しく、脂気の多い料理を好んできた。/そのせいで持病の消渴になったにもかかわらず……。/人間は真に弱いもので……。分かってはいても、そんな食習慣を変えることができずにいたのだ。/私は朝鮮の人間でもなければ……。長く居る人間でもない。/私の好む料理を出せばいいものを……。/なぜ意地を張ったのじゃ?(第19話、シナリオ・ブック2：36)

このように国家を代表する使節が自己の味覚という人間の次元で自己の在り方を問われことになる。使節は国家間の関係よりも個人としての自己の在り方を問われたのはなぜかをチャングムに問いかける。チャングムは答える。

チャングム 私はただ、尚宮様の志に従っただけでございます。

正使 志とはどんなことだ？
 チャングム いかなる場合にも、食べる方に害となるものを出してはならないということでございます。/それが料理人の歩むべき道だとおっしゃいました。

正使 そのために、自らに危険が及んでもか？

チャングム すでに……ハン尚宮様は私に身(マ)を持って見せて下さいました。

正使 真に頑固な師弟じゃ。/そうか……分かった。/料理人に道理と所信があるように、/料理を食する者にもまた、道理がなければならぬことが……。/料理する者が真っ直ぐな心で私の体を守ろうとしているのに……。/当の本人が体を省みず体の害となる料理を食べるなどとは言語道断だ。/食べる側にも道理があるのだった。/実を言うと、香辛料で麻痺していた私の舌は、お前の料理に草の味しか感じられなかった。しかし食べれば食べるほど、食材固有の味がして実に美味しかった。/また違った味の空間であった……。 (同)

使節はここでは使節であるよりも前に一人の人間である。つまり、彼は料理を食べる側として料理人に対して何ら特権的な立場ではなく、料理を介して対等な立場に立つのである。料理はそのような対等な人間としての使節との関係を作り出すわけである。そのようなチャングムの「心意気」を認める使節の言葉には国の大小を超えた人間としての根源的なスケールの大きさへの賛美がある。

正使 朝鮮の小さな国に住んでいるが、お前の心意気は大陸よりも大きいものがある。/出発まで、私の食べる料理は頑固なお前の師匠とお前に任せよう！ (第19話、シナリオ・ブック2：36-37)

ここで描かれているのはもちろん脚本家の創作によるものであろうが、料理という技術を担う人間の在り方へと関心が及んでいる。この関心はもともとは特定の時代の条件を超えている。すなわち、それは一般に歴史を超える人間の存在に基盤を持つものであろう。そしてそれはその当時の制度のもとでは宮廷の料理人としての「心構え」・「信念」・「勇氣」という徳目に注目させるものである。この徳目は、王の健康をどのようにして保持するのかについて料理人の使命を問うところからきている。このことについては脚本では中殿(皇后)からことのなりゆきを聞いた王の母親皇太后(大妃)の言葉として示されている。この立場から皇太后は料理競合に判定を下す。

大妃 中殿は、水刺間の最高尚宮の徳目は料理の腕だけではダメで、料理に心構えと信念をもち、必要なら王の意志をも正す勇氣がなければならないと言うのだ。それでこそ王の健やかなる玉体を保持できると言うのだ。/私はそこまで考えが及ばなかった。/従ってこの度、課題を出していたわけではないが、ハン尚宮の、正使を感服させた菜食と、チェ尚宮の山海の珍味とで、二回目の競合を行ったものとする。/二回目の結果はハン尚宮の勝ちだ！ (第19話、シナリオ・ブック2：51)

＜「王への最高の料理」＞

「王への最高の料理」という課題に野苺の砂糖漬けを出したチャングムは、それが「王への最高の料理」である理由を訊かれて答える。

チャングム 野苺は、母が亡くなる間際に、最後に食べてくれた物でございます。/傷を負い食べることもままならなくなった母が心配で、野苺を摘みました。/弱った母は自分で噛むことも出来ず、私が噛み砕いて母の口に入れました。母はそんな粗末な野苺を口ににして、微笑みを浮かべ息を引き取りました。/殿下はすべての民の父でいらっしゃいます。/たとえ粗末なものであっても微笑んで食べてくれた私の母のように、どうか民をお守り下さいますよう。/私は母を想う気持ちを込め、この料理をお作りしたのでございます。(第21話、シナリオ・ブック2:96)

これは、一つの料理というよりも、むしろその料理への思いそのものを「王への最高の料理」として出したことになろう。これについて王(中宗)の言葉はその思いに対してのものであろう。

中宗 実にうまい! お前を遣し、逝った母の思いを余は忘れまい。/一人どう生きて行くのかを案じながら、逝かねばならなかった母の思いを忘れずに国を治めよう。/野苺は余にとっても最高の料理だ!/そしてお前は朝鮮一の水刺間の女官だ!(第21話、シナリオ・ブック2:97)

物語では皇太后がこのような弟子を育てあげる

ことも最高尚宮の徳目のうちであり、そのような弟子を側においているのも人徳であるとし、王は補助内人がこれ程の腕ならば、本人の腕は言うまでもないとする。そこで皇太后は王の気持ちを尊重して、ハン尚宮を最高尚宮に任命する(同参照)。

6. 医術

＜医女制度＞

物語のもう一つの主題として医術がある。朝鮮王朝の医療を導いたのは漢方医学であったようである。医術については物語の後半に主題となる。

主人公チャングムは医女として身分は奴婢であるにせよ、女官であることによってよりも高度な学問を学ぶことができた。チャングムの場合、女官であることによって料理の技術を学んだ上に、それを活かすことで、医女としても最高の技術を獲得することができた。奴婢でありながら、チャングムが宮中に戻る機会を得たのは、当時の医療制度上、宮中の女性を治療するのは男性の医務官ではなく、医女のみであったからである。その医女は宮中で育成され、そのうちの優秀な者が宮中に残ることができるので、チャングムはこの制度によって宮中に戻ることができたわけである。

ただし、これも身分制度に加えて男女の差別がある故であったと言わざるを得ない。「女」であるが故にチャングムにはなかなか王の治療が許されなかった。脈診することができないので、皇后の病歴を知るためとウソをつき、王の病状日誌を盗んで見るという身の危険を冒す話になる。(硫黄アヒル事件を解明することで師匠であったハン尚宮の謀反人という汚名を晴らすため、チャングムは身を危険に晒すわけである。)

男女差別の故に男性医が女性を診ることができないという制約から設けられた医女制度は逆説的にはあるが、女性の地位の向上をもたらしたと

言えよう。医女は患者が下層であればおそらく男性をも治療したであろう（映像では何度も出てくる。DVD参照）。医療の必要上身分差別も乗り越えられるのである。その極限的な形態が王の主治医としてのチャングムつまり大長今（テチャングム）である。

王の主治医になれという王の命令とこれを辞退せよという周囲の圧力との間に切羽詰ったチャングムに対して、彼女と駆け落ちまでしたミン・ジョンホは周囲の圧力とはまったく反対に辞退してはいけないと彼女に説く。彼は彼女のうちに歴史的役割を果たす「人」を見ているのである。

ミン・ジョンホ 辞退してはいけません。/人間の
中には特別な定めの人があります。
/望もうと望むまいと……自分の
行動に何らかの意味を放つ人
がいます。ソ医女はそういう人
なのです。/ソ医女が王様の主治
医官になれば、それは朝鮮の歴史
で後にも先にもない初めての
女性になるとうことです。

チャングム 私はそんな名誉など要りません。
ミン・ジョンホ 名誉のためではありません
……ソ医女が探し続けた自分
に戻れと言っているのです。/身
分が低いとなぜ学問をしてはい
けないのか、女はなぜウサギを
追いかけてはいけないのか、疑
問を持った。/それがソ医女なの
です。だからここまで走ってきた
のです。成し遂げられそうも
ない事に立ち向かい、成し遂げ
たのです。/私が今戻るのはソ内
人の身の安全や私の身の安全、
右相大監の思惑のためではあり
ません。/今はそれが大きな事の

ように見えるけれど、そんなことは歴史では多々ある事であり、どうにでも流れていくものです。/しかしソ医女が王の主治医官になれば、それはこの国始まって以来のことです。/ソ医女がやって当然のことなのです。/相応しい人材が相応しい地位に就くことは、私や右相大監の勢力が増すことよりはるかに重要なのです。/それこそソンビがやるべきことです。だから戻るのです。殿下の主治医官におなりなさい。（第50話、シナリオ・ブック3：397-398）

医術の師匠チャンドクも彼女の立場からチャングムに主治医官の命を受け容れよと説く。

ここには女性の生き方についての一つの主張がある。すなわち、医術の道で「人」としての女性の生き方を貫くべきであるという主張である。

チャンドク 主治医官をお受けしなさい！/一日だけでもいいから。/私は親の仇を討ちたいがために医女になったけれど、医術に真剣だった。人の病を治そうと一生懸命に頑張ったわ。でもいくら頑張っても私は所詮、女だった。/患者から信任を勝ち得ることはなかった。病を治しても両班たちは、一夜の相手を要求しては褒美でも授けた気になっている。/だから私は益々気が強くなってきた。石女とも言われたわ。/私が望んだのは褒美でもなければ名誉でもない。ただ……男と同じように、自分

のやった仕事をもって認められたかった。/医女だって医術に精進し、診断を下せるということを見せておやり。/女だって医術の道で、自分の目指すことをやり遂げられる人間であることを見せておやり。/あんたはその才能も心意気もある。たった一日でもいい。/命をかけてもおやり！（第50話、シナリオ・ブック3：398）

チャングムの王命受諾に対して師匠のシン・イクピルが辞表を出したことを受けて、医女たちも書く。官婢身分の意識を引きずっているのか、医女たちも医女が医官になるということを受け容れることができない。拒否するのは、シンビだけである。彼女たちの意識の在り方をよく示すシーンである。

シンビ 私を書きません。

ウンビ 何ですって？

シンビ 殿下のご意思に何か間違いがあるのですか？

ウンビ 何だって？

シンビ 医女は妓女も同然のように扱われます。/殿下の命があったにも関わらず、未だに大臣のお呼びがかかると、その席に行かなくてはなりません。惠民署の医女はもっとひどい扱いを受けています。

ウンビ だから、何なのよ？

シンビ 私は人を助けたくて医女になりました。踊り子になるために医女になった訳ではありません。

ウンビ それとこれと何の関係があるの？

シンビ あります。/これは医女も医官と

同じように医術を施す人間だということ、示すものなのです。/私たちも精進に精進を重ねることで、診断を下せる医官になれるということを示すものなんです。何て生意気な子たちなの。今の言葉は王室の方々への按摩や薬を煎じ、お世話をするのを見くびることなのよ！

ウンビ

シンビ そうではありません。いえ、チャングムは誰よりもそのような仕事に心を尽くし取り組んできました。それはウンビ医女様がよくご存じのはずです。

ウンビ 関係ないわ。どっちにしてもこれは医官ナウリは勿論、私たちや御医女様を侮辱することなのよ。（第50話、シナリオ・ブック3：404-405）

ここでの「踊り子」と「医女」との区別についてはさておき、医術という点で医女と医官とは差別はあってはならないとする立場がある。この立場は男女平等を徹底させようとするミン・ジョンホの考え方に貫かれている。すなわち、彼は人材登用について性別ではなく人物本位を貫こうとする。或る人間についての評価は性別にあるのではなく、個々の「人」の「人」としての在り方つまり「人物」にあるというわけである。まさに個人を個人として捉えようとするこの考え方には揺らぎはない。それは言うまでもなく個人的な好悪という次元を超えている。

中宗 医女チャングムは女人である。それ故、重臣たちが反対をするのだ。/そちがそれに拘る理由を申してみよ。

ミン・ジョンホ 最も重要なことは人だからでござ

中宗 人とな？
ミン・ジョンホ はい。殿下。殿下の一番の責務は優れた人材を選び適所に据えることとでございます。/優れた男を選び適所に据えるのではなく……優れた人を選びその場所に据えることとでございます。/既に医女チャングムは王室の治療に当たっておりますし、疫病と誤認し民を死に追いやった状況では、それが食中毒であることをつき止め、多くの命を救いました。

中宗 医女チャングムの手柄であったのか？
ミン・ジョンホ はい、そのとおりでございます。/それに、この度の提調尚宮、オ・ギョモ右相大監の例を取ってみても、医女チャングムはどのような脅迫や誘惑にも惑わされることのない人物でございました。

中宗 それは承知しておる。
ミン・ジョンホ 殿下のお側に置くべき医官として何の不足もない人物でございます。(第51話、シナリオ・ブック3：418-419)

<医女教育>

チャングムの受ける医女教育において当時の医術の学問的位置付けが明らかにされている。その教育は天文学習から始まる。

シン・イクピル 天象列次分野地図 [訳注：朝鮮太祖時代に作られた現存する最古の天文図] だ！/これは太祖

(テジヨ) [訳注：朝鮮王朝の始祖、李成桂(イ・ソンゲ)。(1335~1408。在位は1392~98)] 大王時代に作られた我が国からみた星座地図である。/なぜこれを学習するのか。/それは星の動きを知ることによって季節が分かり、その年は寒気が強いのか、湿度が高いのか、暑いのが分かるからだ。/また、人間は自然界の一部であるゆえ、病もまた自然界の中でとらえなければならぬからである！(第33話、シナリオ・ブック2：380)

以下、「二十八宿の始まり、角宿」から説明されるシーンが続く。

また呼吸法の訓練が野外で行われる。医者には自ら養生法を知り、人々に広める使命が課せられるのである。

シン・イクピル 息を吐きながら十歩以上歩き、息を吸いながら五歩以上歩くのだ。医者は自身を養生する術を知り、養生法を発展させ人々に広めねばならない。(第33話、シナリオ・ブック2：383)

医女教育の一環として医術教育に並行して教養教育としての経典教育が行われるシーンが続くが、その教授は医女になるための教育に経典を習うことの意義を認めていないという設定である。彼は『明心宝鑑 天命編』を開かせ、修練生たちにその一節の意味を尋ね、誰も答えないのを見ると文字を読めないのかという。チャングムが答えると、答えを認めて前に出てこさせ、自分の代わりに一字ずつ読ませ、修練生たちに書き取りをさせる。経典教育は文字を読むことだけに限定されるのである。

イ・ヒヨヌク 天聴寂無音 蒼蒼何処尋 非高亦非遠 都只在人心。/どういう意味だ？ 分かる者は？/文字を読めるのではないのか？ 誰かおらんのか？

チャングム 天は静寂で音もなく、蒼く澄み渡っている。/何処で尋ねるべきなのか。高くも遠くもない。/全てのことは人の心にあるという意味でございます。

イ・ヒヨヌク そのとおりだ。よし、お前。前へ出る。出るのだ……。

チャングム、前へ進み出る。

イ・ヒヨヌク 皆に向かって座るのだ。字を一つずつ読んでやれ！

チャングム ええ？

イ・ヒヨヌク 「空」の「天(てん)」！/何をしておる？ お前たちは紙に書き取れ！/これからこの子という文字を書き取るのだ。/官婢が経書を習ってどうするのだ。/字が読めれば充分。/これからは私がない時、お前たちで自習しろ。/どうした？ 早くやれ。

チャングム 「聴く」の「聴」。「しずか」の「寂」。

イ・ヒヨヌク なかなか賢いな。有望だ。

チャングム 「無い」の「無」。「おと」の「音」。「青い」の「蒼」。「どうして」の「何」。(第33話、シナリオ・ブック2：384)

身分制度のもとで官婢出身である医女の位置付けが医女教育において教養という点でどのように捉えられていたかが分かるシーンである。

医女教育の根本に貫かれるべきものとしての

「恐れ」については厳格に教育を行うのは経典教育ではなくて医術教育である。それはすでに人間教育の根本である。一つの試験で「不通」つまり不合格とされたチャングムは教授にその理由を尋ねた際に、この根本について指摘される。

チャングム ナウリは私には医者としての品性がないとおっしゃいました。/教えてください。何ですか？ 備えます。/どんなことをしてでも身につけますから。教えて下さい。

シン・イクピル お前には医者を持つべき恐れというものが無い。/私はその恐れこそ医者の基本だと考えている。/誤った治療がとてつもない結果をもたらすことに対する恐れが無い。

チャングム いいえ。私もその恐れを経験しました。/鍼の勉強をした時、誤って師匠を危険にさらしたことがあります。

シン・イクピル そんな経験をして何も分かっておらん。/お前、本当に医者になつてはならん人間なんだな！ 謙虚さのかけらもない……。(第33話、シナリオ・ブック2：391)

「好奇心」と「恐れ」とは往々にして両立しないものようである。チャングムは好奇心の向かうところどこまでも知識を追求してしまうのであろう。しかし、そのチャングムも実習教育の中でどこまでも愚直に患者の状態に注意を向け記録を取る同僚のシンピの態度に学び患者の立場に立つシン教授の真意を理解する。

チャングム シン教授のおっしゃる通りだわ……。

シンピ どういうこと？
チャングム 私は生意気だった！ 患者の記録や摂生には注意を向けなくて、自分の医学の知識だけに頼って患者たちを診てきたの。/悪いけど……あなたが記録したものと一緒に見ていいかしら？

シンピ いいけど。でも大して役には立たないと思うわ……。/ただ全部書いていただけだから……。(第33話、シナリオ・ブック 2：400)

実はこの態度はハン尚宮から料理について学んだことと共通しているであろう（料理についての項参照）。しかし、さらに人の生命に関わることをめぐって医者との在り方の厳しさが「謙虚」という点について語られる。薬材と毒材とが区分できないことについての説明のシーンはその点をよく分らせる。

シン・イクピル 医者とはそんなものだ。/薬一つで人を救うことも殺すこともできる。よって、医者に無知と失敗は許されない。/自分だけが知っているという傲慢はそれ以上に許されるものではない。/傲慢は断定を生み、医者への断定には人の命がかかっているのだ。/名医などいない。/病に対し謙虚であり病の全てを知ろうとする医者……。/人に対し謙虚であり人の全てを知ろうとする医者……。/自然に対し謙虚であり自然の全てを知ろうとする医者……。/謙虚あるのみだ。(第34話、シナリオ・ブック 2：404)

「恐れ」を知ったと言うチャングムに対して、さらにダメ出しのようにシン教授の言葉は厳しくなる。

チャングム ちょっと知っているからと恐れもなく、思い上がっていたことが今やっと分かりました。

シン・イクピル 思い知ったと錯覚するな。/人間、そう簡単には変わるものではない。/聡明な者ほどなおさらそうなのだ。/医者は聡明な人間ではなく……。深みのある人間がやるべきだ。/深みを持って。さもなければ私はいつでもお前に不通をつけるだろう。/骨に刻み血に流れるようにするのだ。(第34話、シナリオ・ブック 2：405)

シン教授は、チャングムが「聡明な人間」であると認めている。しかし、彼はだからこそ彼女に対して厳しく「深みのある人間」であれと要求するわけである。

医官の治療を拒んで王を困らせる皇太后に自分の生命を賭けてチャングムが出した機知あふれるなぞなぞには当時の人間が共有した教養が示されている。

チャングム 人を言い当てる問題でございませう。/どのような人物なのかということですよ。/その人は古くからの食医でございまして……。中国皇帝の食医はその人がその起源とされております。/またその人は、一家の奴婢であらゆる辛い仕事をしましたが、その一家すべての人の師匠でもありました。/その人が生きていたころはこの世は泰山でありましたが……。その人が亡くなると

……この世は水に沈んだという伝説があります。/その人をお当てくださいませ。/しかし……大妃様のご病状は一刻を争うことから……猶予は一日しか差し上げることができません。(第37話、シナリオ・ブック3:68)

このなぞなぞの答えは「母」であることが出題者のチャングムから皇太后・王・皇后(中殿)の前で明かされる。

チャングム この女の主な仕事は食医と申しました。/母親は子どもの食べること、身なり、寝ること、体調、この全てに気を使います。/食医とは……殿下が召し上がってはならない物が何か、また何が殿下のお体に良い物なのか、昼夜問わず殿下のご健康を考える仕事でございます。/それ故、中国の皇帝が置いた食医の起源は母でございます。/ですから、大妃様は殿下の母君であり食医なのでございます。/またこの女は一家の奴婢のようですが、実は一家全ての人なお師匠と申しました。/母親というものは子には寒い思いもひもじい思いもさせることなく、自らは辛くとも子には平穏を与え、子どものために奴婢よりも辛い思いをして働くのでございます。/しかしそのような母の慈しみがなければ、子は何一つ身につけることができないのでございます!/ゆえに、母親はその一家の最も辛い

奴婢であり、誰よりも素晴らしい師匠だと思うのです。/この女がいる時は、この泰山でありませんが……。/いなくなれば、この世は水に沈むと申上げましたのは……。

大妃 生きている限り私は王の心強い山にならねば……でも私が死ねば王の涙でこの世は海になろう。/なのに、母である私がどうして王の苦悩を分からないといえるでしょう。

中宗 母上様。

中殿 大妃様……。

大妃 本当にとんでもない子だこと。/最初から決まっていたのです、私が負けることは。/どの道、謎が解けなければ治療を受けなければならぬ……解ければ……息子である王を苦しめている自分に気付く、そんな問題だったのだ。(第37話、シナリオ・ブック3:78)

これは親への孝という儒教的な道徳を逆手にとって皇太后に母としての自覚を促すなぞなぞであろう。そこにはまた中国皇帝の話が持ち出されるところには中国に範を求める当時の教養の在り方が示されている。

<医術における実証>

王・皇太后・皇后ら王族の治療という権力のゆくえを左右する局面で技術の水準が問われる。その水準は実証によって示される。診断・処方および病因の解明に際して、決め手になるのは実証である。逆説的ではあるが、当時においては権力闘争を超えるものとしてかえって実証が求められた

ことになろう。ここに歴史を超えるものへの視点が働いていると言えよう。

王が失明した病因が自然にあることをチャングムが明らかにする。病状に表れるものとは異なった病因として自然の連鎖があるという。

チャングム 殿下を苦しませた狐惑病は肝経湿熱によるものでございます。

中殿 肝経湿熱？

チャングム はい。それが脾臓を傷め……食欲も落ち最初は傷寒症のような症状を見せたのでございます。/しかし、この病因が再び腸や血、気までも冒し結局、視力をうばったのでございます。

中殿 なるほど……そこまでは分かった。/しかし、お前は、本来の狐惑の処方とは違ったことをやった。それが知りたい。さあ、話してみなさい。

チャングム 私も最初、狐惑病を確信し内医正ナウリに処方をお願い致しました。しかし、直接脈診をしてからは、肝経湿熱を引き起こした原因が別にあるのではないかと……そこに考えが到ったのです。

中殿 それは何なの？

チャングム 砒素中毒によるものでございました。

中宗 何？ 砒素？

中殿 砒素というのはもしや……。

チャングム はい……中殿様。

長番内侍 なんと！ 誰かが殿下に毒を盛ったというのか？

チャングム はい。

中殿 誰が？ 一体誰がそのような恐

ろしいことを？

チャングム 自然の仕業でございます。

中殿 自然？

チャングム はい。砒素は少量でも人の命を奪う猛毒でございます。/殿下の瘡症を治癒するために使った温泉に、目に見えず毒見にも触らず気づかない極少量の砒素が含まれておりました。/それくらいの微量では体内に入ったところで何の症状も表れません。

中殿 ということは、蒸し風呂や湯におつかりになっただけで、お体の中に砒素が入り込んだというの？

チャングム いいえ。/温泉は瘡症治癒に役に立ちました。しかし問題は殿下が毎日、欠かさず召し上がられた牛乳でございます。

中殿 牛乳ですって？

チャングム はい。その牛乳は温泉近くにある牧場からのものでした……その牧場の牛は温泉と同じ水源の地下水を飲んでいたので。

中殿 では、その水を飲んでいて牛の牛乳をずっと召し上がっていた殿下のお体に……。

チャングム はい。中殿様！/庶民に牛乳は中々手に入りません。それで何の問題も起きませんでした。しかし殿下は毎日のように召し上がっておられたためにそれが、少しずつ積もり……それが肝臓を冒すことになったのでしよう。/よって砒素を解毒する防已と、膿をとり気力と抵抗力を養

う効能を持つ紅参を使いました。

中宗 おお……。
中殿 すばらしい……。/内医正でさえも分からなかった殿下のご病気を、見事じゃ！（第46話、シナリオ・ブック3：287）

王宮においては王族の生命の安否が問われる故に、医術という技術の悪用の可能性もあると言わざるを得ない。しかしながら、またそれ故に、実証することが他の場合にもまして問われるに違いない。

<医術を用いて復讐？>

医術が悪用されることもありうるということはチャングムの「復讐」の思いにも付きまとうものである。当時の科学技術の水準にあって最高のものにチャングムは触れることができ、体得することができた。その技術の遂行にあたっては、それを悪用してはならないといういわば技術の倫理が料理・医療の両分野で示された。両分野での教えを受けたチャングムは、とくに医術の習得と復讐との二つの課題に取り組む。物語では医術という技術の悪用に対して、その善用のために闘うチャングムの姿が描かれる。

医術には悪用への危険がある。母親と師匠との恨みを晴らそうとするチャングムはこの危険とどのように対処するのか。この故にチャングムが医術を修得することに反対する者がいる。例えば医者チョン・ウンベクである。彼は、以前あやうく宮廷からの追放を免れ宮廷菜園で働くように命じられたチャングムの上司であり、彼女の理解者であった。しかし、彼は医術へのチャングムの志の真意が復讐にあることを知って、これを許さないと言うのである。これに対してチャングムの医術の師匠チャンドクが反論するシーンは当時の医術

の位置付けをめぐるその問題の所在を明らかにしている。すなわち、医術は人間が人間であることにどのように関わるのかという問題である。

チョン・ウンベク そんなことなら今すぐにやめろ！/医術は人を助けるものだ！そんな怒りの心で医術を修めてはならん！/絶対に許すことはできん！ 怒りに満ちた者が鍼をもってはならん！/今すぐやめろ！ すぐにだ！

チャンドク なぜいけないの！/私も怒りから鍼を手にした！/人を救うためではなく、人を殺すために鍼を手にしたのよ！

チョン・ウンベク それが医女として言う言葉か？/医術に携わる者が夢にも思ってはならぬことだ！

チャンドク 私は医女である前に一人の人間！/人間であるからこそ怒りがあるのです。/自分の病に怖気づき酒に逃げる人間には分からないわ！（第30話、シナリオ・ブック2：324）

チャンドクは親の仇を討つために武術の代わりに医術を習ったことを語り、その仇を救えと言うのかと、医女である前に一人の「人」としての在り方を主張する。

チャンドク 私がもし男だったなら武術を身につけて、親の仇を討ったことでしょう。/しかし女であるがため医術を習った。/そして、人々が人を生かす鍼を身につける時、私は人を生かす鍼と、死に至らしめる鍼を同時に身につけた。/人々が人を生かす薬を覚える時、私は生かす薬、死に至らしめる

薬、両方を覚えた。そして今、誰もが認める医女になった。/それでも救えと？ 救えと言うの？ (第30話、シナリオ・ブック 2：326)

チャンドクという言葉はチャングムの二重の課題を明らかにしている。すなわち、復讐を果たすことと医術を体得することである。

チャンドク チョン・ウンバクが言っていることは正しいわ。/怒りに満ちた者は優れた医者にはなれない。私を見れば分かるでしょう。怒りから医術を学んだけれど、怒りか医術、どちらかを選ばなければならない時がきつとくるわ。/これからはお前が苦しむことになる。/でもお前には、復讐を果たすことと医術を体得すること、どちらも成し遂げてもらいたい。心からそう願っている。(第30話、シナリオ・ブック 2：327)

チャンドクは、さらにこれらの課題を果たすためにはチャングムが「人間」として備えなければならない課題を述べる。

チャンドク(声) 成功する人間はどんな人間か知っている？/単純で情熱的な人間よ。でも、もう一つ大事なことがあるの。/現実を知り、その上に立つこと。/周りの人を味方につけて、力をふるうこともできなければ。/これからお前はその難題に挑むことになる。/その挑戦に成功すれば、望どおり二つとも成し遂げられるでしょう。(第30話、シナリオ・ブック 2：328)

チャングムはもともと「単純で情熱的な人間」である。その点で彼女は成功する人間の第一の条件を満たしている。「現実を知り、その上に立つこと」という第二の条件は彼女にとって難題である。しかし、彼女の存在そのものが権力との闘いによって可能なのである。彼女は権力による犠牲の上に出会った両親の娘として生まれた。また彼女は料理を権力のために利用することに対して闘ったチョン尚宮およびその志を継ごうとし権力の犠牲になったハン尚宮の薫陶を受けている。このようなチャングムの誕生および成長の事情から見れば、少なくとも権力に対して母親およびハン尚宮の無念を晴らすために、みずから「力をふるう」ことも不可避的なことであろう。このようにチャングムの存在そのものが或る意味で権力と同じ次元に立ってこの権力と闘うことによって可能であると言えよう。

医術の師匠チャンドクが言ったように、チャングムには怒りと医術とのどちらかを選ばなければならない時が訪れる。「疫病」とされたものが「食中毒」であるのかどうかを実証するために傷んだ野菜を食べ発病したチェ尚宮を治療することになった時である。

驚き慌てるチェ尚宮、落ち着いた表情で脈を取るチャングムの手を払いのける。

チェ尚宮 いくらでも医女はいる。お前ごときに治療は受けぬ！

チャングム 私もかかりましたが治りました。/この病について一番よく知っているのは私です。/ですから、御医女様が私を選ばれたのです。

診察を始めるチャングム。鍼を取り出す。

クミョン 何をしている？

チャングム 治療中でございます。

クミヨン 出てお行き！/お前ではなく、他の医女をよこしなさい！

チャングム この病について一番よく知っているのは私です。

クミヨン つべこべ言わず、言うとおりになさい！

チャングム 何を恐れて私の治療を拒まれるのです？

クミヨン 口の利き方に気をつけなさい！今すぐ出てお行き！

チェ尚宮 いいわ。治療しなさい！

クミヨン 提調尚宮様！

チェ尚宮 この子の言うとおりによ。/恐れることなど何もないわ。/ハン尚宮が死ぬ間に私をどう中傷したかは知らないが、私は天に恥じることなど何もない。/そんな私が何を恐れよう。/治療しなさい！/自分のみ清廉潔白だと言ったんでしょね、ハン尚宮は！/私を見くびっていたくせに……私の命、今お前の手中にあるわ。さあ、やっでご覧なさい。

横になるチェ尚宮。穴の位置を探るチャングム。本来打つべき場所に打とうとする手を止め、急所に打とうとする。母とハン尚宮の無念の死を思い出し手が震える。結局、本来打つべき手首に鍼を打つ。(第41話、シナリオ・ブック3：160)

チェ尚宮に鍼を打つという母とハン尚宮の仇を討つ絶好の機会を前にチャングムは震える様子を脚本家の小説は次のように描く。

「鍼箱からもう一度、鍼を取り出すチャングムの手が激しく震えていた。頭に浮かぶのは、洞窟どうくつで死んでいった母の姿だった。次に、濟州島かたきで鍼を打っていたチャンドクの震える手先が生々

しく思い出された。手の震えがさらに激しくなったチャングムの怒りは極致に達していた。」(キム・ヨンヒョン2007：下119)

倭寇の首領を治療するよう強制的に迫られたチャングムは、敵といえども病人には医療を施すのかどうかを問われることになる(第31話、シナリオ・ブック2：342参照)。このことは復讐のために医術を用いてよいのかというドラマにおける一つのテーマにとって伏線として提示されていたものである。

7. 愛

<チャングムの医術に示される母親の愛>

ドラマで描かれる愛の一つに子への母親の愛がある。チャングムに官位を授けるという王命が臣下たちの猛然たる抵抗に出会ったとき、この愛ゆえに医員たちは王命に従うことを表明した。チャングムの医術を承認するその根拠はチャングムの医術が母の愛そのものであるということにある。ここに「女」が「人」として承認されることが母親というものの役割においてはじめて可能であったという歴史の制約が示されている。むしろ母親の役割という誰にも否定できない事柄において歴史を超えるものが登場している。

チャングムの医術における母親の役割をチャングムの師匠シン・イクピルが述べる。

シン・イクピル 私は私的には医女チャングムの師匠でございます。/それでも尚、医女チャングムの指揮に従うというその理由は！/医女チャングムの医員としての姿勢にございます。/医女チャングムの医術は母の愛そのものでございます。/我が子を救うためには自らを投げ出す母の姿でござ[い]ました。/我が子が病に倒れぬよう、

速やかな予防を心がける母の姿であり、子を治すために人々の希望を呼び起こし心を一つにさせる母の姿でございました。/都の痘瘡、大君様の痘瘡の治療でそれを実践しました。/内医院の医官、医女たちは既に医女チャングムの指揮のもと、誰一人不平を漏らすことなく、大君様の病を治癒しようとする信念を持ち、動きました。/よって、殿下のご意思に同意するものでございます！(第51話、シナリオ・ブック3：442)

<チャングムへのミン・ジョンホの愛>

チャングムへの愛を抱くのはミン・ジョンホである。チャングムが彼の命の恩人であることは別にしても彼は女官(=「王の女」)である彼女への愛を禁じられていることに耐えながら育てていく。チャングムが味覚を失ったとき、ミン・ジョンホが慰める言葉の無力さを感じながら言う言葉にチャングムへの人間としての苦しみへの共感が滲み出ている。

ミン・ジョンホ 唐の時代、耳が聞こえなくなった楽士がいました。/楽士なのに耳が聞こえないなんて、どれほど辛かったことでしょうか。/耳を治そうとこの世の医者という医者を訪ねて回り、あらゆる事を試したそうです。

チャングム それで、医者を見つけたんですか？

ミン・ジョンホ いいえ。代わりに自分が天下一の名医になったそうです。/そして最後に奏でる楽器の音も、こ

れまた天下一だったとか。/慰めにもなりませんね。/そういうものです。/いい時は悪口を言ってもありがたく受け取られるが、/辛い時は何と言ってあげればいいのか、言葉もみつからない。/「うまくいきますよ」なんて、出任せのようだし……。/「お気の毒に」なんて……。/もてあそぶようで……。

チャングム 今のそのお言葉には慰められました。(第14話、シナリオ・ブック1：337)

ミン・ジョンホの心はチャングムのために借り出した医学書に挿んだ紙に書かれた詩に示されている。そこには一篇の詩に託すその想いのしみじみとした深さが示されている。

ミン・ジョンホ(声) 小さな銀杏の木は芽吹くのも難しく/孤独な竹は一人じっと蒼い光を放つ。/暗い闇は東の間のこと/日が沈めばたそがれはまた美しい。(第14話、シナリオ・ブック1：337)

チャングムはミン・ジョンホに両親のことを話し、彼から慰め以上の言葉を受ける。

ミン・ジョンホ よく、くじけずに、強く生きてきましたね。

チャングム 強いのではなく、他に生きる方法を知らなかったんです。

ミン・ジョンホ ソ内人！/これからは、私にあなたの痛みを分かち合わせてください。(第25話、シナリオ・ブック2：199)

ミン・ジョンホはハン尚宮が先に戻っているという王宮に奴婢として流された濟州島から逃げようとするチャングムに今は思いとどまれと言う。

どこまでもチャングムのことを思いやる彼の真実の愛が語られるシーンである。

ミン・ジョンホ ただ逃げ出すだけでは、いずれ捕まって、死を待つばかり。/九死に一生を得、逃げ切れたとしても、生涯、ソ内人のご両親のように追っ手に追われます。今だけ辛抱してください。私が必ず、謀反ではないことを明かして見せます。/思いとどまってください。/しかし、思いとどまらない、今すぐ逃げるとおっしゃるのなら……、/お助けいたしましょう。いいえ、今だけではない、三日後、一年後、三年後、十年後であっても、私はいつも、ソ内人の傍にいます。/しかし今は……どうか私の言うことを聞いてください。無謀なことをしては、逃げる途中で死んでしまいます。(第28話、シナリオ・ブック2：279)

ミン・ジョンホのこの言葉にチャングムが従ったことによって、彼女が「誓い」を果たす可能性が出てきた重要な言葉である。そしてふたりの相互の関係を存続させ発展させる可能性が出てきたわけである。

しかし、この可能性はふたりが結ばれるという可能性が出てきたということをただちに意味するわけではない。彼は両班であり、身分の違いからチャングムとの正式の結婚はできないとされる。というのは、女官である限りは、元々できないわけだが、医女としてのチャングムにしても身分は奴婢であったからである。

ミン・ジョンホは鍼に成功したチャングムに自分がその道で力になれない辛さを控えめに語る

が、チャングムはむしろ「人間」として認めてくれたことへの感謝の言葉を述べる。

チャングム いえ、いつも見守ってくださいます。/私の才能を才能として。/私の志を志として。/女としての私を私として。/人間としての私を私として。/全て受け入れて下さっています。/女官の身であった時は、女官としての自分が人間としての自分より先でした。/そして今は奴婢としての自分が人間としての自分より先です。/でもナウリは私がどんな身なりをしていても、私のありのままを見て下さっています。/だから幸せです。言葉にできないほど申し訳なく……言葉にできないほど幸せで……。 (第31話、シナリオ・ブック2：347-348)

「疫病」で封鎖された村にチャングムを探しに戻ってきたミン・ジョンホを村人の怒りによる生命の危険から救うために彼を薬材買出しという名目で村の外に出す。愛するミン・ジョンホのためのチャングムの決断である。彼女は心の中でジョンホに語りかける。

チャングム(心の声) さようなら。/私のことを探しに来てくださって、本当に嬉しかったです。/それだけで充分です。(第40話、シナリオ・ブック3：138)

ミン・ジョンホは教えられた村まで行き、薬房がずっと以前に閉じられているのを知り、チャングムの意図を悟る。彼は役人の手で火が付けられて炎上する村に戻り、納屋に閉じ込められ気を失ったチャングムを助け出す。

意識が戻ったチャングムを抱きしめるミン・

ジョンホ。

チャングム もう戻れないのかと……戻れないのかと思い……怖かったのです。

泣きながらチャングムを抱き起こし、頬を撫でる
ミン・ジョンホ。

ミン・ジョンホ 私が、戻らないはずがないでしょう。/私を大切に思うあなたの気持ちを知っているのに……。/危機から私を救ってくれようとするソ内人の気持ちが分かるのに……戻らないはずがないでしょう。

チャングム 戻ってくださって、ありがとうございます。/本当にありがとうございます……ナウリ……ナウリ！

固く抱き合う二人の姿。(第40話、シナリオ・ブック3：145)

ミン・ジョンホの愛は痛切な仕方でも示されている。自分が打ち首になっても「医女」チャングムを王の「主治医官」に任命してほしいと王に請願するという自己の一身を挺しての彼なりの愛し方である。王がチャングムを主治医官にするとの思いに彼女を好いている気持ちからだとして後宮にせよという皇太后の言葉に逆らえない王に対する言葉である。

ミン・ジョンホ 殿下！/真に恐れながら申し上げます。一時、私は医女チャングムを連れ逃亡をしたことがあります。

中宗 何だと？

ミン・ジョンホ そうしなければ……そうしなければ、きっと医女チャングムとは永久に、たった半日すらともにできぬと思い、連れて逃げました。/しかし、その日のうちに戻りました。/その理由は……チャングムを愛しているからでした。/女人としても勿論ですが、彼女が持つ才能、その才能を成し得る過程にある困難や喜び、悲しみ、失敗までも……また、その事を成し遂げる道のりで見せてくれた信念と志、どれも私には美しく大切なものだからでございます。/殿下！私はあの女人の全てをいとおしく大切に思っております。/例えあの女人と一緒にすることができぬとしても、例えあの女人の行く先により大きな悲しみや苦痛があろうとも、医女チャングムの進む道を私が遮るわけには参りません。/医女チャングムの才能は医女チャングムの生き方そのものであり、彼女自身なのです。/それ故に医女チャングムは、どのような壁にも阻まれず殿下の主治医官になるべきであり、そのように後押しすることがソンビたる私のなすべきことであり……それがまた、私の医女チャングムへの愛し方なのでございます！/殿下！ 臣ミン・ジョンホ、この命を賭して申し上げます。どうか……どうか……医女チャングムに自分

の道を歩ませてください！/殿下の主治医官にご任命下さい！/朝鮮の歴史に堂々とその名を刻ませてください！/それほどの人物であり、それほどの女人であります！/その代わり、殿下への数々の不忠と、朝廷を混乱に陥れたことの責任を私が背負って参ります！/不屈きな私ゆえ、たとえ打ち首を命じられても、私は甘んじて受ける所存でございます！/私はよく存じております。/臣下に君主の女人を想うことは許されぬということをして！/殿下！ 不忠の臣を打ち首にしてください。(第53話、シナリオ・ブック3：478-479)

＜チャングムへの王の愛＞

ドラマの上では王もチャングムを愛するようになる。彼女を側室にすることを断念することにはなためらいがある。そこには母親のすすめもあるが、男として未練があるということであろう。チャングムはあくまで医女として働くことが王に尽くすことであるとして、これを許すように願う。王としてもチャングムの意思に反してことをすすめることには踏み切れない。つまりチャングムと王との間にはどこまでもミン・ジョンホとの人格的な関係におけるような愛が欠けている。王としてもチャングムの意思に反してまで側室にすることもできない。さらに彼女のミン・ジョンホへの愛を無視することはできない。

王はチャングムを後宮に迎えることはせず、主治医官にすると告げる。それが王としての中宗なりの愛し方である。そのとき史実にも或る程度添った仕方で王がどのように宮廷において権力の

闘ぎ合いの中にあっただかが語られる。

中宗

最初の妻であったシン氏を追放し、その父を死に追いやって余は君主の座についた。/その時すでに私は、君主の座には愛などという感情は入り込む隙などないことを悟った。/廢妃シン氏が余への思いから仁王山の岩にチマを被せたが、余はそれにすら目を向けることができなかった。/目を向ければ、臣下から賜葉を下せと上疏が上がるのではと恐れたからだ。そうやって余は愛する人を失ったのだ。/それから数年、数多くの妃や嬪たちを迎えたが、それたちの背後にはそれぞれの勢力の者がいた。/そんな余がそちを愛するようになった。/まことに久しく訪れた感情であった。/だが余は、そちを後宮には迎えぬことにした。/権力の狭間にそちを置くことは耐えられないから……そちの意に反してまでそちを手に入れたいはない……。/だが余の側にいてくれ。/そちが余の唯一の心の支えゆえ、どうすることもできぬ。/これまた余の、余なりの愛し方である。/君主としての命令であり、男としての願いである。(第53話、シナリオ・ブック3：480-481)

これらの描写のうちに女性が「人」としてどのように扱われるのかをめぐって、この時代なりの仕方で明確な輪郭を持って登場している。「女」はミン・ジョンホや王との個別的な人格的關係に

おいては認められるにせよ、制度的には受け容れられない。そこで王によって「大長今」という称号がチャングムに与えられたという、この名称についての解釈が脚本において示される。チャングムに官位を授けることに対する臣下の反対を前にして、王はこの称号を授けることにする。

中宗　そなたたちが女人に官位を与えることは、経国大典に反すると申すゆえ経国大典にある官位を与えることはせぬが、正三品堂上官の地位と品階に値する「大長今」の称号を授ける。/これは世襲されず、医女チャングム一人に例外的に適用する!/また医女チャングムは正三品堂上官の侍医ではあるが、内医院の統括はせず、余の主治医のみを受け持つ! (第53話、シナリオ・ブック3: 481)

ここには身分制度というこの時代ゆえの制約の中で或る人間がどのようにして「人」でありうるのかが示されている。そして「女」であるチャングムの場合、この「人」であることが当の身分制度において位置付けられる他はないのである。このような形にせよ、チャングムの医術の中にある歴史を超えるものは現われるわけである。

8. 人間としての女性と歴史

<チャングムの物語から学ぶもの>

ドラマに描かれたチャングムの物語から「いま」日本に生きるわれわれは何を学ぶのか。もちろん15世紀末から16世紀半ばにかけての朝鮮王朝時代の一時期について、史実であるかどうかはともかく、少なくとも部分的には知ることができる。このこと自体、隣国の歴史について知ることの少ないわれわれにとって貴重な機会であろう。とり

わけ、ドラマの一部には「倭寇」が登場し、その描写によって日韓の関係が韓国の側からの認識によって示されることは自国の歴史が隣国の歴史にそのような関わり方をしてきたことについて考えさせる。豊臣秀吉の命による二度にわたる侵略については比較的知られているにせよ、それも主として自国側の関わり方についての認識に止まっていると思われる。このことから見て、このドラマにおいて韓国側からその歴史における両国の関係がどのように認識されているのかを知ることは貴重なことであろう。

しかし、より重要なことは隣国の歴史に疎いわれわれがこの国にしっかりとした歴史が実在したことそのこと自体を知ることである。さらに言うまでもなく大事なことはそこで描かれた歴史の内容である。その中で描かれているのは他国の文化のうちに生きるわれわれにとっても普遍的な問いである。すなわち、チャングムという一人の女性の半生が題材になっているわけであるが、その人間像のうちに女性が人間としてどのように歴史と関わるのかという問いである。このドラマにおいてこの普遍的な問いをめぐって韓国ならではの仕方でも描写されるのを観ることができるのである。もちろんそのように描く脚本家や監督の視点によることなのではあるが、この時代をそのようなものとして捉えようとする自体が彼ら制作者の、したがって韓国の「いま」における問題認識を示しているであろう。ここにわれわれはこのドラマから学び、「これから」に活かしていくべきものが見出されるであろう。

それは、ドラマという形であれ当時の女性が人間として歴史の制約のもとに生きながらも、歴史を超えるものを蓄積していったということである。そしてこの蓄積の描写において描かれるのは、そのような営みを続けるものとしての人間への確信であろう。そしてとりわけ、そのような人間と

して女性が生きることへの確信である。

＜歴史を超えるものへの視点＞

この蓄積は、このドラマでは主として料理と医術との二つの領域において見出されている。それがとりわけ歴史の制約のもとで描かれるのは医術の描写においてである。このことを象徴するのは、このドラマ冒頭の「運命」の予言に対応する最後のシーンである。

ドラマは当時の医術では許されなかった人間の体に刃物をあてることに大胆に取り組み人間を助けるチャングムの姿とそれを見守るミン・ジョンホの言葉で終る。妊婦が子癩（チャガン [訳注：妊娠中毒症]）で母子ともに危険な状態から救うためにチャングムは手術に踏み切り、夫となったミン・ジョンホもやむをえず認めるのである。

チャングム 赤ん坊は無事です！ 母親も無事です！ だから言ったでしょう！/なぜ駄目だというのですか？ できるじゃありませんか！/こうやって母子ともに……助かったじゃありませんか！/できると言ったじゃないですか！ /私、やれるって！/なのになぜ駄目なんです？ ね？

ミン・ジョンホ(声) きっとこれから先も、この女人は時代に逆らい続けるだろう。/そして、この女人は時代に問い続けていくだろう。/人の命を救ってなぜいけないのか。(第54話、シナリオ・ブック3：521)

ここには赤ん坊を産む母親を救う主人公の姿のうちに人間の「命」とその「命」を産み出す人間とを救う医術というものが描かれている。医術という技術は例えばこの仕方では歴史そのものをつくる人間の「命」を救うところにその存在理由があ

るわけである。

ここで問われるのは、このエピソードが何を意味するのかということである。そこには医術の存在理由が明らかにされている。しかし、その描写は医術の存在理由を明らかにすることのみ限られるわけではない。さらに医術という技術を発揮することについて具体的に描きながら、より一般的に歴史を超える人間の営みが描かれているのではないだろうか。つまり個々の歴史的事柄をどのように描くのかということもさることながら、そもそもそのような事柄をどのように捉えるのかという視点が提示されているのである。このことをめぐってチャングムが母子ともに助ける描写のうちには歴史の基盤となる「命」をつくることになることに注目したい。すなわち、歴史の基盤となる「命」への注目によって歴史を超えるものへとわれわれを向かわせるのである。

その際、この「命」に関わる歴史を超えるものへの視点についてドラマにおいて注目に値する描写は、母親という役割のそれである。というのは、親への孝という儒教的な立場は歴史の中で人間を制約することもあるけれども、ここでは母親という役割を積極的に肯定することによって逆説的ながらかえって歴史を超えるものを認識させるからである。もちろん女性であることは母親という役割に尽きるものではない。しかし、歴史の制約の中では、とりわけ当時の儒教的な立場においては母親であることが「女」が「人」であることへの突破口となったということも無視することはできないのである。それは次のことに示されよう。すなわち、チャングムがその医術の中で母親の愛を示すことによって男性優位の観念を乗り越え周囲の信頼を獲得し、「人物」本位の立場を承認させたことである。つまり女性が人間として生きることが社会的に承認させるということが誰にも否定することのできない母親の役割から導き出された

のである。

このことが当時の歴史の課題として「いま」の問題意識から見出されたと言えよう。そこには「いま」われわれが「むかし」から存続しているものとして認識し「これから」活かすべき事柄が示されている。すなわち、主人公チャングムに象徴される仕方で女性が身分制度や男女差別という歴史の制約の中にあっても、この制約を乗り越えていくということである。この課題は「むかし」のものであるだけではない。言うまでもなく「いま」も課題であり続けている。

この「いま」の問題意識には当時の認識では「女」として差別されていた女性が「人」として歴史を切り開くことへの方向付けを見出すことができよう。ここにはどのような困難を前にしても決してあきらめることのない人間への確信が示されている。とりわけそのような人間が人間であることについて当時は差別されていた女性がむしろ歴史の制約を乗り越えていくことが描かれることによって男性を含めた人間像一般に膨らみを与えているのである。「いま」日本に生きるわれわれはドラマに見られる韓国の「いま」の問題意識から、そこで描かれる人間像の膨らみを学び「これから」活かしていくことができよう。

本稿は、ドラマを構成する諸要素のうちごく基本的な要素に限定して主としてシナリオから引用した言葉について若干の考察を試みたものにすぎない。ここで取り上げ得なかった他の諸要素との関係を考慮しつつ、考察をさらに深めていくことは今後の課題としたい。

註

註1 物語の前半の主題は宮廷の料理人としてのチャングムの物語であるが、実在のチャングムが料理人であったのかどうかは不明であり、この部分を含め、後半の主題と

なっている医女であったという『中宗実録』に記された事実以外には物語全体がほとんど創作によるものであることについては李京源2005：〔解説〕72-73参照。朝鮮王朝の宮廷の歴史において想定されうる多様なテーマがプロットとして物語に組み込まれ、これを構成している。放送開始一年前にプロットが出来上がっていたという。イ・ビョンフン監督インタビュー、ドラマDVD Box V特典映像参照。当時の時代状況一般については武田編2000：165-191参照。中宗朝については李成茂2006：上335-373参照。

註2 ドラマの原題は「大長今」となっている。「大」という形容によって「長今」のサクセス・ストーリーという趣が示され、それ故にこの題名が付けられたと思われる。これは、史実についての監督・脚本家による一つの解釈であろう。チャングムという名前は朝鮮時代、きわめて一般的な女性の名前だったという。「大」がついたのも王の主治医としての名声からではなく、単に同名のチャングムを区別するために呼んだとする説もあるという。李京源2005：〔解説〕73参照。

註3 「誓い」という表現は『宮廷女官チャングムの誓い』という邦題による。

註4 ここで「運命」概念が問われよう。その概念史については幸津2010：71-82参照。ギリシア悲劇における「運命」については同：73参照。

註5 辞書的には読みはキン、意味は「おば（母の兄弟の妻）」。漢和辞典292参照。この「女」偏に「今」とは「破字（パジャ）」[キム・ヨンヒョン2006：上30訳注：「漢字を分解または合成して別の字を当てさせるなぞなぞ」]ではチョンソグが「今日出会った女」

つまり廢妃ユン氏という意味であるとされる（二番目は「順」で川に頭が関連し、三番目は「好」で女に子が関係しているという意味であるとされる。シナリオ・ブック1：14参照。

註6 広瀬京子「コラム 階級・身分制度について」シナリオ・ブック1：278参照。

註7 兩班とそれ以外の身分を厳格に区別するルールとして「班常バンサンの法道ボフド」があったという。李京源2005：〔解説〕14参照。

文献目録

『『宮廷女官チャングムの誓い』シナリオ・ブック 第1巻－第3巻』張銀英訳、キネマ旬報社 2005 [=シナリオ・ブック1－3]

DVD『宮廷女官チャングムの誓い DVD-BOX I-VI』NHKエンタープライズ、バップ2005-2006

キム・ヨンヒョン『大長今 テジャングム 上中下』根本理恵訳、角川文庫2006-2007

李京源2005『『宮廷女官 チャングムの誓い』のすべて』鄭銀淑訳〔解説〕、幻冬舎

李成茂2006『朝鮮王朝史（上）（下）』李大淳監修、金容権訳、日本評論社

幸津國生2010『『冬のソナタ』の人間像—愛と運命—』花伝社

小林信明編『新選漢和辞典 新版』小学館1977（=漢和辞典）

武田幸男編2000『朝鮮史』山川出版社

